

時代を切り取ったかのような古の風景がここにある。



うちわ職人

住井一成(住井富次郎商店)

岐阜県岐阜市



vol.4

見た目からも涼をとる、情緒豊かな日本流

岐阜の伝統工芸に水うちわがあります。水うちわとは、雁皮紙(がんびし)という薄い和紙を貼り、専用の天然ニス塗りを仕上げたうちわのこと。ニス塗りが和紙に透明感をもたらし、見た目も涼しげな繊細さが、とても魅力的なうちわです。岐阜市では現在、専業で岐阜うちわを製作しているのは住井さん一人だけになっているという。薄い和紙(美濃和紙)を使って作られる水うちわは、ひとつひとつ丁寧に作られていました。



光が透き通る水うちわ

天下布武、楽市楽座と長良川の鶺鴒

標高329メートルの金華山山頂にそびえ立つのが岐阜城。この地を治めていたのが織田信長です。「天下布武」を掲げ天下統一の拠点とし、井ノ口という名称から「岐阜」へと改称した。また、金華山ふもとの街では商人が自由に商売を行う「楽市楽座」がしかれ大変な賑わいを見せることになった。その街を流れている長良川。鶺鴒は、長良川の夏の風物詩、5月11日から10月15日まで毎夜行われています。かがり火の下で浮かぶ鶺船と鮎を追う鶺の姿。鶺匠が「ほう！ほう！」と、かけ声をかけながら鶺をあやつる幻想的な音風景は、残したい日本の音風景100選に選ばれています。



岐阜城と長良川

江戸時代の街並みが残る場所

戦火を免れて奇跡的に江戸時代からの街並みが残る川原町。かつては長良川上流から木材・竹材・美濃和紙等が集まり、材木問屋や紙問屋がこの場所で商売を営んでいました。美しい格子づくりの建物が並ぶのは、材木問屋が集積していた、その当時の名残り。



日本昔話しに出てきそうな、うちわ工房

川原町にある住井さんの工房は、元は材木問屋が使っていたとのことで、築100年以上の歴史を持つ商家づくりの建物。こじんまりとした素朴な味わいは、日本昔話しに出てきそうなイメージです。



初夏の鶺鴒シーズンの頃から、店頭のうちわを並べて販売。観光客も多く訪れ、店は大変な盛況ぶりをみせる。水うちわは、ネット販売も行っているが基本は店頭販売。店まで足を運んでくれた方へ対する住井さんの心遣いといえます。



岐阜うちわには、漆を塗った、塗りうちわや柿渋をつかった、渋うちわと言った色鮮やかなものもあります。

手仕事だからこそ、ひとつひとつのうちわに魂が宿っていくようだ

水うちわの作業風景。雁皮紙(がんびし)という和紙に金魚、朝顔、鶺鴒の風景といった絵が描かれている。「ぷっ」と吹くと簡単に吹き飛んでしまうとても薄い和紙だ。薄い和紙を使うからいっそう慎重に、丁寧に、丁寧に作業が進められていく。



真竹でつくった骨に糊づけ。叩き刷毛を使い密着させていく紙貼りの作業

うちわ職人の遊び心

かき氷でおなじみのデザインのうちわがあった。違う氷じゃなくて水だ！通常、絵描かれている千鳥も鶺になっている(笑)



製作途中の水うちわ(いや、水うちわ)

耳を澄ませば……。川原町から聞こえてくる音

「ごん！ごん！ごん！」と川原町に音が響く。うちわの型抜き作業。専用の型を使い木槌で叩いて打ち抜いていく。決して耳障りな音ではない、リズムよく聞こえてくる音が心地良い。川原町から聞こえてくる、これもひとつの音風景。



カタチに加え、失われていく「音」もある

むかしの街並みが残る川原町。ここで店を構える住井さんの工房が、この街の個性を形づくる影響も大きい。「今のところ、後継者はいないですね」と話す住井さん。型抜きで聞こえる川原町ならではの音がなくなった時に、何か寂しくなった……と、気づくことになるのは避けたい。

